

モラルジレンマ教材をもとにした 「考え・議論する」道徳への試み

——教員は道徳における議論型授業をどう捉えるか——

富田 幸子・赤井 悟

An Attempt to Teach “Moral Education Through Thinking and Discussing” Based on Moral Dilemma

TOMITA Sachiko and AKAI Satoru

Abstract: In the course of moral education becoming a subjects, there is a general concern among teachers as to “what” and “how” they should teach. In this study, working with students, we used moral dilemmas as a way of exploring this conflict in a series of classes. This resulted in energetic and animated discussions due to the fact that the students were able to imagine themselves in the same situation as their instructors. By observing the discussions, participant teachers found that a “moral dilemma educational approach” was beneficial. Drawing on this approach, the method discussed here offers a new way of teaching moral education through thinking and discussing based on diverse values.

Key Words: moral education through thinking and discussing, moral dilemma teaching materials, conflict scene

要旨：道徳が教科化される中、どのように道徳授業を進めるべきか指導方法に関する現場教員の関心は高い。本研究では、モラルジレンマという葛藤場面を描く教材を使って議論型道徳授業を実施したところ、従来の読み物教材を扱った授業ではみられない活気ある授業が展開され、他者の立場に置きかえて考え、自らの道徳的判断に基づく意見を発表する生徒の姿がみられた。そうした授業での生徒の様相やワークシートから、教員自身にはモラルジレンマ教材を活用した道徳授業を肯定的に受け止め、議論型授業の効果を感じている様子が窺われた。今回の取組は、多様な価値観をめぐって「考え、議論する」道徳の進め方を検討していく上での示唆となった。

キーワード：考え議論する道徳、モラルジレンマ教材、葛藤場面

1. はじめに

平成31年度、道徳が中学校でも教科化されることに伴い、道徳授業も大きな転換を迎えた。これまでの道徳授業は週時程の中に組み込まれていたにも関わらず、学級活動や行事などの特別活動に転用されるケースも多くみられた。それは5年前には中学生であった

A 大学学生へのアンケートからも読み取れる。学生50名に「中学校時代、道徳は授業としてどれくらい実施されていましたか?」という質問に対して、週時程どおりの「週に1回ほぼ実施」と答えたのが14.9%だった。それに対して「2週間に1度程度」が31.1%、「月に1度程度」が28.9%、「1年間で数回のみ」15.6%、「ほとんどなかった」と答える者も11.1%存在した。次に「印象に残っている中学校時代の道徳授

業をあげて下さい。」という質問に対しては、「ネットリテラシー」「薬物」「いじめ問題」「平和教材」「人権問題」などの内容があげられたが、中には「交通安全」「休みの過ごし方」「学校行事での決め事」「学級での決め事」など、本来学級活動の内容に当てはまるものをあげる者もいた。また「ほとんど印象がない」と答える者が存在するなど、道徳授業に対する印象の薄い者も少なくない。道徳授業を熱心にやっていたと答えた者は 5 名存在したが、授業内容として記憶に残るのは「ネット・スマホ問題」「薬物」についてビデオで学習したという内容であった。

学習内容や行事が精選されない中で、年間 35 回の道徳の時間を確保するのは容易でない。しかしながら、道徳が教科化され、評価を伴うという一大転換が起こる中で、教育現場には、これまで以上に道徳授業を意識的に捉え、そのあり方を探っていこうとする流れが存在するのも事実である。

道徳授業づくりでは、教科の授業以上に教材研究の時間を要することが多い。山口県の初任者の研修で、道徳授業について「よく分からないと感じていることは何か」という質問をとったところ、「評価の仕方」「教材の吟味（発問構成）」「指導方法の工夫」では 50%、「授業の進め方（学習指導過程）」では 40% を超える回答があった。さらに、「中心発問は、何に気を付け、どのような発問をすればよいのか」「どのようにして主体的に取り組ませるか」「どのように思考を深めさせるか」など、発問構成や指導方法の工夫に関する質問が多くみられた（やまぐち総合教育支援センター、2018）。こうした各課題は初任者だけに限ったものでなく、週 1 回の教科としての授業をどのように実施していくかも併せて、学校全体で考えていく課題となっている。

その課題の一つとして、道徳授業をどのような形態で進めるかがあるが、今、学習指導要領の中で示されているのが「考え、議論する道徳」である。平成 27 年 3 月、学習指導要領等が一部改正され、道徳教育は抜本的な改善・充実に向けて、多様で効果的な指導方法を工夫し「考え、議論する道徳」への質的転換を図ることとなった。

学習指導要領（2017）の中でも、「生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと」があげられ、これまでも中学校の道徳授業においては、主人公の気持ちを重視する読み物教材のほか、映像ソフト、映像メディア、新聞など多彩なメディアを取り

上げるなど工夫溢れる形で取り組まれるケースはみられた。ただそうした授業において「考え、議論する」活動が、道徳授業の中で活発に行われるケースはまだ少ないのが実態であろう。

ベネッセ教育総合研究所（2014）の調査によると、道徳授業に対して、「好き」・「まあ好き」と答える割合が小学校時には 69.0% と肯定的な見方があるのに対し、中学校時には 50.9% へと減少することが明らかにされている。さらに、授業中に自分から進んで手をあげるといった活動も、小学生の 69.8% から中学生の 55.2% へと減少するという実態が示されている。そうした現状がある中で、道徳授業において「考え、議論する」授業といった主体的で活気あふれる授業展開を目指すには、何が必要となるかを検討していく必要がある。

活気ある議論を授業の中に取り込む上で不可欠なものに教材の選定があると考えられるが、多様な価値観を扱いお互いの議論を促す教材として、モラルジレンマ教材がある。モラルジレンマとは、道徳的な正しさにおいて曖昧な岐路の場面ないし状態をいう（荒木、2017）。モラルジレンマ教材の中にはそうしたジレンマ状態が学習者にもたらされるよう、登場人物がどうすべきなのかを葛藤する場面が必ず組み込まれている。結論についてはオープンエンドの形をとるものとし、登場人物の「心情的変化」に重きを置き一つのねらいに向かって進めていく従来の読み物教材の進め方とは違った展開となる。モラルジレンマ教材では、一つのテーマに対して賛成であるか反対であるかを考える問題提起が最後に必ず設けられている。

議論型の道徳授業を目指す上で、モラルジレンマ教材を取り上げた実践として、A 市の B 中学校における道徳授業がある。この道徳授業は、毎年 9 月、全学年一斉で行われる道徳授業参観の中で実施されるもので、生徒の活発な意見交流がみられる授業を目指すため、「意見交換の中で友だちの幅広い考えを聞くことにより、自分が気づかなかつた視点を持つことが可能となる」（荒木、2013）といわれるモラルジレンマ教材を、初めて取り上げ道徳授業を行った。

そこで、本研究では、葛藤場面が必ず描かれるモラルジレンマ教材を扱った道徳授業の中で、次の点を明らかにしたい。

- ① 生徒のワークシートからモラルジレンマの問題提起に対して賛成・反対の意見が議論後に変化するのか、また賛成・反対の意見にはどのような根拠があげられているかを分析する。

② 今回の道徳授業に取り組んだ教員が、生徒の意見や生徒の授業への参加度などから、モラルジレンマ教材及びそれに基づく議論型道徳授業をどのように捉えたかについて、質問紙及びインタビューを通して明らかにする。

2. 研究の概要

従来の A 市の B 中学校の道徳授業は、読み物教材を取り上げたいわゆる「読み物授業」がほとんどで、登場人物の心情の変化を捉え道徳的心情を理解することに重点が置かれていた。今回の価値観の葛藤場面が存在するモラルジレンマ教材を活用した授業実践は初めてである。

この授業では、与えられたテーマに対する生徒自身の考え及び判断力を問うワークシートを事前及び事後に書かせるものとした。

2.1. 授業

今回取り上げた教材は「新モラルジレンマ教材と授業展開」(荒木, 2017) の中で掲載されている「家族の絆」である。表 1 に詳細を記す。授業を実施したのは、9 月中旬の 5 限目の授業参観時間 (50 分)、授業

表 1 道徳授業で取り上げたモラルジレンマ教材

主題名	家族の絆
主題設定の理由	家族の苦悩と葛藤への共感し、よりよい家族関係を築くための道徳的判断を養う。
内容項目	C 主として集団や社会との関わりに関すること (14) 父母、祖父母を敬愛し、家族に一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。 (家族愛, 家庭生活の充実)
教材の中身	血を分けた親子関係と数年間にわたって愛情を注ぎ込んで育てた情に基づく人間関係の間で厳しい選択を迫られる場面を描いている。家族の絆は、血と情の両面に存するのが通常であるが、あえてどちらかを選ばなければならない時、私たちは何を根拠に選択し判断し行動するのであろうか。このような思索を通して家族の苦悩とカットに共感しながら家族という末を見通した判断と理由付けを喚起する。
考えられる生徒への発問	①息子と血がつながっていないと知らされたときの両親の気持ちは？ ②自分の子どもを見たとき、どんな気持がしたのだろうか？ ③交換して本当の我が子を育てるべきか、それとも交換せずに他人の子を育てるべきか？ (議論の中心テーマ)

者は、各学級の担任教員である。

このモラルジレンマ教材は、学習指導要領に示される「家族愛」をテーマとするもので、赤ちゃんの取り違えが判明したことで、後に子どもを交換するか否かという問題を扱っている。

最初にモラルジレンマ教材を読ませた後、子どもを交換することに賛成あるいは反対のどちらの立場に立つのかとなぜそう考えるのかその根拠を、また議論後においても同様に賛成反対の立場とその根拠について、生徒全員に記述させた。

2.2. 議論

今回授業を受ける学年の生徒は、道徳授業内での議論にほとんど経験がなかった。そのため、今回の実践では全員で一斉に議論するという型はとらず、賛成意見をもつ側、反対意見をもつ側からそれぞれ 6 人の代表者を選出し、計 12 名で議論をすることとし、他の生徒は聴衆に回ることにした。

ここでは、賛成反対の多様な意見が交流できるような構図を意図的に構築することを目的としており、ディベートのようにどちらかのチームの勝利を判定するゲーム的な要素をもつものではない。

また、全員が均等に 1 回は議論の機会をもてるよう、議論型道徳授業を事前に 2 回行った。1 回目は葛藤を描いたジレンマ教材ではないが「より良い学校生活」が内容項目となる「制服着用をどう考えるか」をテーマとする授業、2 回目は「友情・信頼・集団生活の充実」を内容項目とするジレンマ教材「メル友って大切な友だち？」をテーマとする授業である。

3. 研究の方法

3.1. 対象及び実施時期

本研究は、A 市の B 中学校で道徳授業を行った 3 年生 6 学級の生徒及び担任教員を対象とする。有効回答数は、生徒 177 名、教員 6 名であった。

3.2. 方法

「子どもを交換して本当の我が子を育てるべきか、それとも交換せずに他人の子を育てるべきか」という点をどう考えるか、生徒が議論前、及び議論後に記述したワークシート (表 2) から道徳的判断力とその根拠を検証する。

さらに、担任教員には、今回の授業中にみられた生徒の取組の様子やワークシートから、モラルジレンマ

表 2 生徒用ワークシートの質問項目

①	あなたは「子どもを取り換えること」に対して賛成ですか。反対ですか。
②	なぜそのように考えるのか理由を書いて下さい。
③	議論を終え（聞いて）あなたは「子どもを取り換えること」に対して賛成ですか。反対ですか。
④	なぜそのように考えるのか理由を書いて下さい。

教材による議論型道徳授業をどのように捉えたかについて、質問紙に記入していただき、不明点については後日インタビューを行った。質問紙の内容は、以下の 5 項目である。

- ①授業中の生徒の取組の様子はどうでしたか？
- ②モラルジレンマ教材は結論を出さないものでしたが、その点についてどのように考えますか。
- ③今回の実践を終えて感じたこととは？
- ④今後モラルジレンマ教材を使うとしたら、こうしたらよいなど何か気づいたことはありますか？
- ⑤モラルジレンマ教材と読み物教材とを比べた場合、両者の違いを何か感じましたか？

4. 結 果

4.1. 生徒のワークシート分析

議論前後の意見を比較すると、議論前に「子どもを交換する」に賛成した生徒は 37 名、反対した生徒が 139 名いた。議論後においては、賛成が 37 名、反対は 134 名となったが、議論後、賛成から反対に変わる生徒が 8 名、反対から賛成に変わる生徒が 9 名など、議論の結果判断が変わる生徒は全体の 10% 程度であった。議論前後とも、「子どもを交換する」という点については反対が多い傾向がある。また、「中学生が判断するには難しすぎる」「2つの家族が二世帯同居のように一緒に住めばいい」というような賛成とも反対とも判断しかねる生徒が議論前に 1 名、議論後には 6 名存在した。表 3 に、生徒の意見の分布を示す。

議論後の賛成・反対の根拠となる意見で共通点が見られるグループを概念と定義し、グループ分けした。その結果、【血の繋がりが大事】【今後の成長の中で生

表 3 生徒の意見の分布

	子どもを交換するということについて		
	賛成	反対	その他
議論前	37	139	1
議論後	37	134	6

まれる心情】【我が子に対する親の心情】【育てる自信の喪失】【子どもの適応】【環境変化への適応不安】【これまでの繋がりの重視】【親と子どもの心情】【子どもの尊重】【血の繋がりにより今の心情】【子どもの尊重より不安】といった 11 の概念が抽出された (表 4)。

4.2. 教員の質問紙分析

担任教員が記述した質問紙から意図を十分読み取れない内容については、インタビューで内容を補足した。その結果、次の 4 つの内容にまとめることができた。

【活発な授業中の様子】

モラルジレンマ教材を活用することで、議論がしやすい活発な授業が構築できた。従来の一つの狙いへと導く道徳授業より、生徒は発表する人の話をよく聞き、他者との相互作用の中で自分の考えを固めていき、発表も自分の言葉で話していたことがうかがわれる。

【多様な価値観を持つ教材】

多様な価値観がある中で、道徳教材としてどちらが正解といえない多様な価値観を扱う教材の活用もあっていいのではないか。1つの価値観に基づく教材より、モラルジレンマ教材は話し合いもしやすい。

【討論の新たな形態】

今回のようなモラルジレンマ教材を活用した議論型授業を今後も検討していきたい。学年に議論の経験が少なかったため、今回は一部の生徒が発言する型で行ったが、この経験をもとに今後は全員で議論という型も可能ではないかと考える。

【生徒の新しい一面の発見】

議論型授業は生徒の新たな発見につながり、生徒の意外な一面を学級全体で共有できる場となった。など、モラルジレンマ教材で行う議論型授業に対する肯定的な捉え方が明らかとなった。その元となる代表的な意見を表 5 に示す。

5. 考 察

中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編 (2017) の中には「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある」と、価値観に対して明言した箇所がある。道徳授業を実践する上で、教員が心がけなければならないのが、授業におい

表4 生徒の意見の変化とその根拠

意見	概念	具体例
「賛成→賛成」の根拠	【血の繋がりが大事】	<ul style="list-style-type: none"> 大きくなったらどんどん見方も変わり、血の繋がりを大切にするという人の意見に共感できた。 結局どちらにしても辛い日々になるのだったら、血の繋がりを大事にした方がいいと思うから。
	【今後の成長の中で生まれる心情】	<ul style="list-style-type: none"> 親と顔も似ていないと本人もいずれ思うようになり今まで他人だったと思うと心が痛い。 このままほおっておいて大人になった時にそのことを言われたらショックが大きいと思うから、後悔するのだったら今の方がいいと思う。 子どもに、既に取り違えの事実を伝えているのでこのままだと子どもも一生苦しむ。真実を伝えているなら交換したほうが良い。 (これからから先やってくる) 思春期の時に実の親じゃないと言われたら何もいえないという意見にとても共感した。辛い出来事だけど交換した方がこれからのためになるかも。
	【我が子に対する親の心情】	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠した時の喜びとか妊娠中に可愛がっていた子をずっと可愛がって育てていきたいから。 我が子の方が愛情も沸くと思うから。 自分の産んだ子を離すわけにはいかないし、他人に渡せない。
	【育てる自信の喪失】	<ul style="list-style-type: none"> 顔が似てこなくなって仲がこじれたり、親も血の繋がっていないことを知ってしまった今、きちんと育てる自信がなくなるだろうから。 これからの人生の方が長いし、他人の子どもと思うと、今までのように過ごせないと思うから。
	【子どもの適応】	<ul style="list-style-type: none"> 血が繋がっていないといわれたら意識してしまうし初めは向こう(実の親)でなじめなくても成長するにつれて普通になると思うし話し合いを十分している家族なので大切にしてくれると思う。 子どもは短時間で慣れるから早く交換して、前の子ども以上に愛情を注いだらいいと思う。 8年なら実の親が育てても影響はないと思う。2つの家族で今後も交流を深めるのもいいと思う。
「反対→反対」の根拠	【環境変化への適応不安】	<ul style="list-style-type: none"> 環境や友達など家族以外のあらゆるものが変わりすぎてしまうから。 子どもにとってはそのままの環境で育った方がいいと思ったから・・・。 環境の方が人には大事だと思う。血はその人の基礎を作っているけど、そこからどうなるかは環境の方だと思うから。 自分の育てた子どもが違う人の所へ行ってもなじむことができるか分からないので反対です。
	【親と子どもの心情】	<ul style="list-style-type: none"> 5年間も愛情を注いできたのにいきなり交換となると親も子どもも辛いストレスになるかも。 もし交換後たくさん思い出を作ってもそれまでの8年間の思い出を思い出してしまうから。 自分が子どもの立場だったら今までと同じように生活できるのが一番幸せで最善ではないかと思う。 お互いの家族と本人の明が交換したくないと言っているから。 子どもが嫌だったと言っているから。 親も交換したら気が収まらないし後悔すると思う。それに、まず子どもにこの話をしない方がいい。 顔が似ていなくても、子どもの方はそんなこと気にせず全然受け入れられると思うから・・・。 今まで本当の親と思って面倒を見てもらいたくさん思い出も作ってきたのに、急に別の親の所に行くのは考えられないと思います。物心ついてからではショックが大きいと思います。
	【これまでの繋がりの重視】	<ul style="list-style-type: none"> 物心ついている時点で、僕は反対です。よっぽど今の両親が嫌じゃない限り血は関係ないと思う。 それまでの育ててくれた両親のことを忘れることができない、昔の生活はどうだったなあと比べて気まずい雰囲気になるかもしれない。 血が繋がってなくても本当の家族になれるという意見が印象的だった。逆に血が繋がっていないと家族といえないのだろうか。 9年間近く過ごした思い出の方が血の繋がりによりも大事だと思う。 実の親より育ててきてくれた人との絆の方が強いという意見を聞いてその通りだと思いました。 この話を考えると自分も今まで大切に「育ててくれたお母さんを大切にしたい」と思う。 初めて育ててもらった人はその人の人生の土台の部分に一番関わっていると思うからです。
「賛成→反対」の根拠	【子どもの尊重】	<ul style="list-style-type: none"> 本当の家族と過ごした方が楽しいと思っていたけど、子どもの意見を尊重して交換しない方がこれからの人生も楽しく過ごせるように思うからです。 その子の人生だからある程度成長し物事を決められるようになった時に自分で選択させればいいので、今はすべきでない。 実の子のほうを育てるべきと思っていたが、親が決めるのではなく子どもの意見を聞いて子どもの判断に任せたいと思います。
	【血の繋がりがより今の心情】	<ul style="list-style-type: none"> 自分の血が流れている方が愛情を注げるのではと思っていたけど、親子とも別れたくないと思っている気持ちが強いですし、相手側もそう言ってきているので。
「反対→賛成」の根拠	【子どもの尊重より不安】	<ul style="list-style-type: none"> 子どもは精神的に弱いから子どもの意見を尊重するべきであると考えていたけど、意見を聞いていて本当の親じゃないことは結構デメリットが多そうだったし、交換しても良いこともいっぱいあると思ったから。

表5 モラルジレンマ教材による議論型授業から教員が感じたこと

生徒の取組はどうだったか	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもの道徳より自分の言葉で話す生徒が多いように感じた。 ・読み物教材の時より、よく考えて自分の意見を言っていたように感じた。 ・人の意見に対しても自分の考えと照らし合わせながら聞いている生徒が多く相手の意見からさらに自分の意見を深めている記述がけっこうあった。 ・3回の議論型授業の中で、他の生徒の意見を聞いたことで賛成から反対、反対から賛成に変わることが何人かに見られた。そうした意見の変化は普段の読み物授業ではなかなかみることがない。議論を通して、生徒の変化を見られたのはよかったと思う。 ・たくさんの意見が出てきた。生徒も自分の意見を言ってそれで終わりではなく、反対の意見が出てきたらさらに自分の考えを深めていく学習活動ができていたように感じる。
モラルジレンマという教材をどう捉えるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の教材は賛成反対のどちらかが絶対正しいという答えがあるものではないので、結論が出ないのは当然である。大事なのは自分が正しいと思っていることを、全員が「正しいと思っているとは限らない」ということを知ることであると思う。 ・正解がないので生徒が大人の望むような答えに寄せずに自由に話してくれる。 ・二律背反でどちらがいいとは答えが出ないものだったが、それだからこそ学級のみんなで考えを出し合えたと思う。最終的に自分でどちらがいいのかを自ら考えさせ、決めさせたのも良かったと思う。 ・いつも主人公の心情を掘り下げる発問をしていると、国語の授業との違いが判らなくなる時があるが、結論を出さない所にこの教材の意味がある。
今回の実践終えて感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもの道徳より、生徒間であるいは教員との間で話し合いのキャッチボールが自然にできた。 ・本当にいろいろな意見が出るので生徒自身も授業に飽きることなく、発言を人の意見を最後まで聞こうとする姿勢が見られた。 ・集中力が途切れることがなかったし、活発に話す生徒がとて増える。 ・自分の意見としてはっきりと主張できていた。 ・3回議論型の授業を行ったがどんどん慣れていき自分の考えを言葉にできたのはよかった。 ・全員が議論できたかというそうではなく、発表を苦手とする生徒が存在したのも事実である。 ・自分自身やっていて楽しかったし、またこうした活気のある議論型の授業をやりたいと思う。生徒側も、こうした授業をまたやりたいといった意見がみられた。
モラルジレンマ教材を使う場合の進め方の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・議論の司会を生徒がするのか、教員がするのかそれも今後の検討課題である。 ・議論型授業というのが初めてであったため、代表者に議論させ、後のメンバーは聞く側に立つという形態を用いるという段階を踏んだ形で実施したが、それが良かったかどうかは断言できない。ただ、今回の実践の中で、自分たちで議論できるという経験を生徒達が持ったことで、次の新たな道徳授業での進め方もみえてくる。例えば、初めに賛成反対を全員に問い全員で議論する形なども可能になってくるのではと考えると楽しみになってくる。
モラルジレンマ教材と読み物教材との違い	<ul style="list-style-type: none"> ・一つの狙いに向かって進める授業ではないので、学級の雰囲気に合わせて担任が独自性をもって進められる。 ・読み物教材をしているとき、正解を出そうとしている生徒も見受けられるが、今回の授業では自分の言葉で言っているのを強く感じた。 ・活発な議論を通して、「普段しゃべらないこの子がこんなことを言うのか」とか、「人の意見に関心を持ち、そんな考え方もあるのか」などいつもの道徳授業では見られない場面があったり、自分自身はっとさせられる場面が教員にあったが、それは生徒も同じだったと考えられる。 ・どちらの意見にも一理あってもやもやしていたが、自分の考えを最終的にまとめることができ、それを発表できたので、すっきりした感じになったという生徒の意見が印象的だった。

て価値観の押し付けにならないような展開である。すなわち、授業内で進められる内容に「正解」を提示しないことを教員側も強く意識しておく必要がある。そうでなければ、生徒は「先生の答えに引きずられる感じがした」「正解のようなものが見えていた」「当たり前のことを言っている感じがした」(永田, 2013)などの感想を道徳授業に抱くようになり、自分の中で自分の考えを問いただし、それを発表しあうような活気ある授業展開は困難なものとなるだろう。

道徳授業の進め方をめぐってはどのような方法がいいのか教員間で模索している実態がある。今回のイン

タビューの中にも「別に考えを押し付けているつもりはないけど、読み物教材をやっているとどうも一つの正解というものが生徒にもわかっていて、そこに生徒はすり合わせてきてるなと感じることがある。」「正解は一つなので意見を聞いても、結局前の人と意見は同じですと繰り返されるだけで・・・。」というこれまでの道徳授業の進め方に対する教員の困り感がみられた。読み物教材の中には子どもたちが一読しただけで狙いがわかってしまう読み物も多く(荒木1988)、教員の期待通りの答えに向かって進んでいく授業のあり方に戸惑いを感じる教員も少なくない。

西田（2014）は「価値多元化」という現代社会において、道徳性の発達是一方的な価値の教え込みや徳目主義的なものでなく議論という双方向的な方法によってなされると論じている。近年「考え、議論する」道徳授業のあり方がいわれるようになり、「多様な試みを交え議論することで、議論や討議や共同的に議論する活動、いわばディスカッション型の道徳授業にも今まで以上に心を向けてみることの重要性」（永田，2013）が指摘されており、今回の授業の取組はまさにそれに合致するものだったと考えられる。

モラルジレンマ教材は葛藤する場面に対して賛成か反対の二者択一を迫られるが、初めはどちらとも決められない迷いの段階からスタートし、他者の多様な考えに触れながら最終的には自分の考えをまとめていく過程が可能となる。なぜそう思うのかその根拠について様々な立場から判断することができ、「道徳的な価値について多様な視点から批判的・創造的に考え議論を可能にし、主体的な判断を求めるもの」（荒木，2017）であり、「従来の心情的な道徳授業の不足部分を補充することができる」（柳沼，2015）教材ともいえるだろう。

今回の授業では、生徒自身「わたしが、その子どもだったら・・・」や「自分が親なら・・・」といった親や子どもといった他者の立場に立って考え、議論の中で繰り広げられる多様な人の意見に関心を持ち、それらを元にさらに自らの考えを固めていく様相がみられた。賛成から反対、反対から賛成に変わる生徒は少数ではあったが、「人の意見を聞いてなるほどと思った」「〇〇さんの意見を聞いて、自分の意見のままでいいと前より強く思うようになった」「自分と違う意見を聞いて、そんな考え方もあるのかと思った」など心の中に揺らぎが起きたり、新たな気づき生まれる中で自分の意見をまとめる生徒もいた。また、議論型の授業にすることで、普段あまり意見を発表する機会のない生徒が、自分の意見を主張する姿が各学級でみられた。

そうした生徒の様相は教員自身がこれまでの道徳授業の中であまり目にすることがなかったものであり、普段見せない生徒の意外な一面を発見する場ともなり、「考え議論する」新たな道徳授業の進め方として、今後も検討していきたいという教員の意欲に繋がるものとなっていることが示唆された。

6 ま と め

本来、モラルジレンマ教材を扱った授業は、コールバーグの道徳性発達理論に立ち、生徒の道徳判断力を高め、道徳性の発達を狙いとする授業である。すなわち生徒が賛成・反対と考えた根拠をもとに、道徳性発達がどの段階にあるかを測るとともに、議論を進める中で道徳性の発達を促すことを目的としている。今回は、モラルジレンマ教材による議論型授業を教員がどのように捉えるかを明らかにすることであったため、生徒の道徳性発達については言及していない。

今後は、モラルジレンマ教材と生徒の道徳性発達という視点での研究を課題としたい。

謝辞

本研究に当たり、道徳授業において話し合いを重ね、精力的に議論型授業に挑戦してくださった B 中学校の3年担任教員のみなさん、活発に議論して授業に臨んでくれた生徒のみなさんに心よりお礼申し上げます。

引用文献、参考文献

- 荒木紀幸（1988）道徳授業はこうすればおもしろい－コールバーグの理論とその実績－ 北大路書房
- 荒木紀幸（2013）モラルジレンマ教材である白熱討論の道徳授業 中学校・高等学校編 明治図書
- 荒木紀幸（2017）新モラルジレンマ教材と授業展開 明治図書
- ベネッセ教育総合研究所（2014）小中学生の学びに関する実態調査 https://berd.benesse.jp/up_images/research/Survey-on-learning_ALL.pdf (2019. 9. 19)
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_011.pdf (2019. 9. 5)
- 永田繁雄（2013）道徳教育の改善方策について－大学の教員養成の充実及び教員の指導力向上の観点から道徳教育の改善方策について 文部科学省発表資料（2013. 7. 18）
- 西田忠雄（2014）子どもの遊びと道徳教育 教育臨床総合研究 12 pp.87-96
- やまぐち総合教育支援センター（2018）道徳教育の充実に関する研究－「考え、議論する道徳」の授業づくりを中心に－ やまぐち総合教育支援センター研究紀要 157 集第1巻
- 柳沼良太（2012）道徳性の発達（監）平野智美（編）中山幸夫 田中正浩 新たな時代の道徳教育 pp.55-67